荆釵記奇俠客傳 第五集

一

125
125

開卷驚奇俠客傳 第五本

東京圖書館

和書門	小說類	三六函	三架	二五號	二五冊

129
25
15

東京帝國大學圖書之印

閑卷驚奇俠客傳第五集卷之四

明治十年交換

浪華　蒜園主人編次

第四十七回

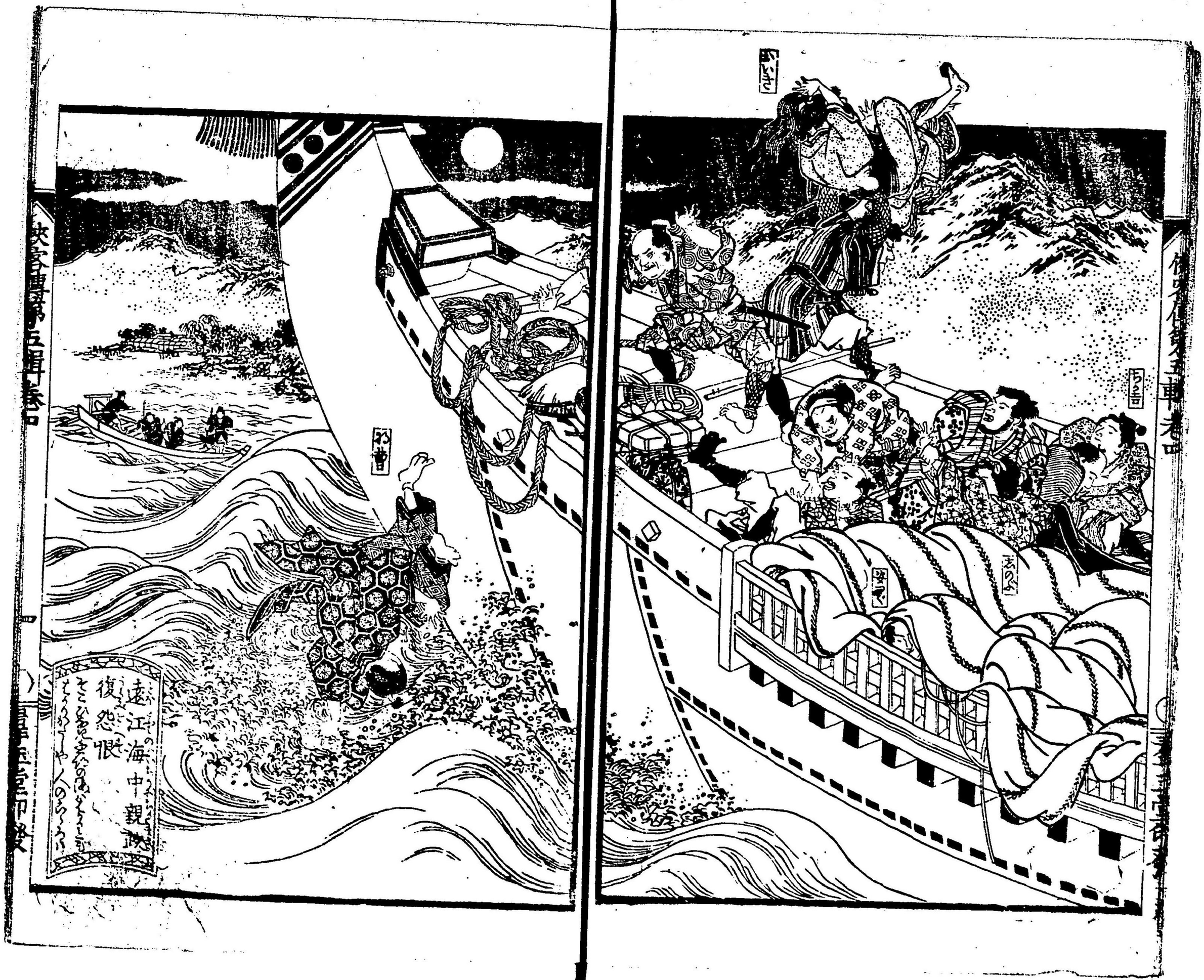
遠江の洋中ゝ奸黨良善を溺し
難波の港口ゝ老僧未来を示す

時候ハ四月の初旬。霞霧く海の面遥ゝ船を漕出せゝ。當下順風徐々ゝ吹くまゝ。
樟子帆を揚走らすゝ。波を凌ぐ音潔くして。船の去くゝ箭の像くるまゝ倒
疊席ゝ坐するゝ如く。島々浦々の送り往く形容。繪ゝ畫まゝ〳〵き景色なるゝ。乘
人共を催して。險不憂苦も忘るゝまでゝ。或ハ睡ル。或ハ又各々の話譚ども。伊
良古ゞ崎を後ゝ。新居の澳も快過て。遠江國御前の澳きゞ来ゝる頃。夕
陽西ゝ光竭て。黄昏迫く做ゝる。英虞氏ハ海上を望ゝ遣て。暮果ぬ間ゝ
准備〳〵る酒肴を拿出て。稲城母子ゝ勸ゝるゞ〳〵。在下們を初めて伴當福子

の者まで小各酒を呑〜あるべし。食歓喜て順風を祝し。下戸ハ序次小夕飯を吃べ
るどする間小。英虞氏ハ一聲叫びて。後さまの小仰反ッて。涎沫を吐くハ〜ら駭〜く。現心
もなく容るべ。大家諤然と驚き噪ぎ。介抱せんとて起んとする小。齊一足痿腰麻痺
て。毫も掙くる慨なし。這抑甚麼とのふ處小一人倒れて。二人倒れて。一箇も涎沫を
吐ねハ〜。开中小在下へ平素より酒を嗜ひ。多く吃ざるゆ故小。要時ハ那
這と助起を小垣衣の信夫も楫取庶吉も。亦是幼年すゆ故小。酷くも吃ね故
るべし。共侶小立噪ぎて。肴病せんと做々まども。竟小同〜く痿痺まて。船
中小ぞ臥こるゆ。任放心地ハ甚くも違ひ。只手脚の運動。物言滓の慨ハ而
已なるまべ。尚も覘ひ居こるゆ。柁柄把こる船長一人嚮こり酒を吃ざるゆ。人々の
倒れ果こると看て。晴跡と思〜く衝立上りて。脚を揚つ舟苓を。蹈々と履鳴せ
べ。底より貫板を撥反〜て。現れ出る癖者四五個。先這那の衆人の倒れこる

光景と看て。齊一呵々とうち笑ひ。俺老主公の謀畧ハ如く。這奴們を一
名も残らず。蒙汗薬を呑こまべ。死人小等しき的と做ぬ。ぞ一端より結
果けて。快海中へ投棄ん。とゆくぞ。一答へて道ゆう。如此せ〜ゆハ殺さんの。
宿鳥を刺よう容易くまどども。然為とハ船の血小塗まて。港口へ着く候面
倒なり。刀剣衣類什麼小まるまで。金銭小成べき東西を奪て。這儘水葬ゆ。
縦令河童と欺く程の。水練ありとも。這様ゆそハ。活復るべきゆうハ〜ら〜。商量
し〜。先英虞氏の両刀を奪畧て。衣服まで剥もせず。痿こる骸を二名〜て。
抬起して。椎の上より千尋の海を望まて。水入と投入こるくまべ。憐ひべ〜。槍刀
弓馬の。技ゆハ譲らぬ壮士も。蒙汗薬と吃こる故小。怎の術もゆく押投られ
て。當下西小落去く汝と。共小流まて弥陀の在まと。御國小去まこるくんし。原
来木造親政ぞ。开子の仇讐を報いんとて。這船長小分付て。稲城母女と英虞

氏を失ふと。失ふと巧うふこと。悪さも憎し。這奴們が百會微塵ふ斫破て恩師の妻子を救ふと心意ハ弥猛ふ急遄ぎども。眼を睜るの物ごふ言ぎだ。況て手足ハ掙ふべ甚麼とも為術す。看る〳〵十餘名の伴當と海ふ投没らまとる心地怎ぐりとや思ひ〳〵宜く査〳〵べう〳〵その中ふ庶吉。枕も手足の動けべふや。這光景ふ堪へ難て。兵〳〵く脚を踏直し。健氣ふも小腋刀を辛うじて拔持つ。前ふ立る一箇の賊が。肩の邊を鋒外ぎふ。斬着きべ那奴ハ大ふ怒を起し。這ふ豎子奴怎を子と。刀を丁と打落せ。金ハ共ふ立蒐て。這奴ハ酒を吃ぎ〳〵狂殆と喧響つ。手把り足捕を拽張て。亦復海ふ投んとせ〳〵と中ふ一個が禁めて。ヤヨ雲時等て。這冶郎ハ年紀より胆の太やるふ。生色欧く愛敬あり。俺老主公の日屬より。男色を好きべく。そうべき龍陽を求めべ。未ふん心ふ恨ひ〳〵者あ〳〵。這ふ豎子を拿へ去て。倘却意ふ恨ひるべ。俺們が功を賞せらまて。褒美ハ望次第ぐらん。縱令ぐん意ふ恨ぎとも。畢竟一個の小豎子なれば。登時殺ぎとも活ぎとも。料理ぐらんハ許多あるべし。這詔ハ如何と。悄語べ。大家齊一諾ふ中ふ。浅痍負る一個の賊の。枕殺まんとて怒〳〵と。金一勸解と納得せ。帆綱を把て庶吉を。斜めと綑めて。舟底へ揑と押入ぐう。偖開次ハ老樹の刀自。又垣衣ぐるみべし。這術妻こを今番の。令郎君の敵手ぐらまべ。這奴も拿へて。大主公ふ為らべ。奈何あらんと。ふを一個が諾ぐ。不日その女ハ拿へ去とも。令郎君ふ後ふべくもの。仇敵を撃んぐ〳〵ひ〳〵。強情的と所ぎまべ過失ぐ〳〵ともいふべ〳〵ぐ。倘事あらべ咱々が脱落ふるぐんも料ぎ難し。然まべ可惜美婦人ぐまぐど。只打綱て海龍王の后ふすることを可ぎまと。ひんべ然ぐうと回答つ。同じく〳〵夾入と投没ぐる。音を聞ぐる開折ハ腸を断心地ぐ〳〵。這比までも在下ハ最初倒まぐうる時。畳有ぐる帆の下へ不意も轉落ぐまべ。快く賊們ふ看処ぐらまぐど。夢の如くふ這光景を。看つ記憶てひ〳〵。


遠江海中親政
復怨恨

然間に卿前の方より高尾舸一艘漕出し。這船を投て寄来るに一瞬く間に漕迹づきて三反許に成る頃書より明く押照る。夕月の光に附て但見舳前に立る人在り。その打扮い亮然に所見徒ど細鎖の甲手脚盾に腹巻も未るかるべし。皂き夾衣を被る。胷に金具晃め光出て。月に光映を競ひ。身材六尺有餘に見えて色赤く肉肥きに月額長く生伸たるに黒漆の太刀鵶尻に佩做し。掌に一條の棒を把る。赤檀木にあらんずらん筋鐵繫く打るに丈八尺許あるを最も軽げに掉廻して其船等と聲を掛け寄よ寄よと指揮する光景。名告で著き海賊の大将軍と所見る。艫の方に部下と見える一個の漢子が半弓に片手前挾て眼を配ひ楫取両個に汗を流して喘々艪を推ども艪て艫方へ寄んとする。威風烈しき形勢を看て。奸賊們い着急忙噪ぎ手足々々艪櫂を取もあまべ。猛可に帆を捲道を

人と力を勠せて曳揚るに在下が不造化に一遍毒手を脱まとりしも再這眴に張上る。帆に撥まて敢無くも。遥に那方へ拽飛さまて。真倒に海底に入ぬと思ひ。仆後へ快くも死入るにそあらん。毫も覚えで做に。已に人の喚聲に忽然耳に入々まべ。不圖眼を開きて是を看るに年老く瘦臞ひとる。一箇の沙門が耳に附く。こを喃々と呼ぶに有る。原来甦まるると思ひく。心を静めて四下を看るに。衆合船とおぼしく貴賤老若几名に取囲まて在けるに。垣衣も再甦生して。沾る衣の侭ぐらに。開旁に卧てとり。那沙門い在下が甦まるを見て。大に怡悦び。如何心下い慥に做欲。且這薬を吃べとて。甚麽にあらん丸剤を一粒投出て給々まべ。在下是を受戴きて。即て服するに香氣馥郁と脾下に通まて。汐を吐に駭く。心地忽ち清亮に成ぬ在下やうく起上る。先那沙門に稽首して。再生の鴻恩を謝す。衆人をも慰労ひく。有し次第を

尋ぬ。那沙門のそれなるか。是は伊豆の下田より。難波津に去く乗合船なり。貧道は所要ありて。土佐國へ去んとして。這船に便船して。昨夜遠江洋を過ぎ。順風もあらざりしを。汝を等とて澳中に碇を下して在りしに。但見べ人の死骸とおぼしく。流れ寓る東西なるを。蓬庫より照らして火に。透して看るべ。最弱き男女那這二箇なるが。溺て間もなきと所看て。汝膳乾てもあらざるべ。貧道酷く可憐に思えて。先船頭に情由を告。船中の衆人にも。人命の得難き譬を。語急く説示し。いろで助る的なるべ。這若男女を助けて験んとしに。齊一同心せられて。力を勠せて女の死骸を。先曳揚て看てあるべ。抗中脆に温氣あり。原来男も仔細あり。と。亦復和主を拽揚るに。同く温氣あるべ。衆人寄て汝を吐しめ。苟蘇を火に焼て。身を煖めるどすれに。何も幽に呼吸出るを。それ蘇生に疑なしとて。抗撓なく勠る程に。漸々氣息も確乎に做べとて彼此耳邊に附て。呼生

しべ。果しなく偖甦生らるべ。是に天幸とのべき。宿世愛と死人々なるべ。抑和主は何處の人にて。什麼なる故に女と共に。海に溺るべ。乗合の乗客は只是情死なるべとのべ。奈何ぞ。と問るに。在下は慚愧に堪ざる。然氣なく紛れて。否這女中は在下と縁ある人にあらず。唯同船の伴侶。今日しも鳥羽溪より鎌倉に去んと發船せしに。料らざるも海賊の奸媒に的て。蒙汗藥を吃せられて。身體自由を得ざるを。開儘海に投入られる。以後の事は毫も記べ。抗十餘名の乗合あり。且這女中の母もあり。伴當もあり。擔物もあり。其仂の人は無しや。欲と問べ。老僧慰めて。それは意外の災厄なりき。四月初旬の名月に。巳に入に。後るべ海上は最闇くて。さる人々は看も留ず。子二ツばかりに追風に做て。汝を宜のるべ。碇を手操真帆を揚。又几十里来に名べ。今は悔とも賢び難し。案に和主仂二名の人は。神佛の冥助ありて。運命強き人なるべとそ。さる狂難の中を脱れて。

這船ハ流を寓るを。甚麽洋も僉前世ろうの定業ろうを如何ハせん。きうとて。酷く莫歎ろうとて。那溺没せる人々も。運あるハ又偖置様ハ命活るも有ぬべしと慰めらるとても。垣衣ハ。毎のう又庶士ばうろうさん什麽成果ろんと惟難つ右ハ左ハ去る又未もあら浪の。回らぬ人と做ぬう欲と思案打て只管ハ泣沉ってあるるを。在下酷く勵して。恁ととも今更ハ。這首を歎くハ要るきやゝ。泊べき所ハ去泊うべ。在下も共侶ハ。你の所縁を訪ねべし心強く思ひぬゝ。恁とても神佛の。冥鑒竟ハ錯誤ぜん。悪人の手ハ失ぬまじあるべうろうと。間ハ。乗合の甲乙ハ。異しき衣を那這脱て。假ハ在下们二名ハ着濡るる衣服を絞ぎつ。火ハ干るゝどする程ハ。夜ハ黎明と明去て。紀伊國熊野の澳ハ来ハろう。登時船頭在下ハいゝゝゝうん。鳥羽より出船しるひしるるべ又那港へ回らまくも。想ひるゝべるるども。去向を急ぐ快船るるべ。你们二位の所以を

もて。那里へ漕回し難し。又這磯頭ハ寄んも巌石峨々し荒磯るんべ。開も亦恊ひがたし。ままべ難波へ着んまでハ。辛抱してその上ハ左も右も〜ゆへと。いゝハ是亦推辞べくもあるゝべ心得うと回答をつ。盤費ハ腰ハ纏てる伏ハ十四五両齎ってゝべ五両許を把出て。先船頭ハ與へつ。幇助らるとする謝禮を演ばべ。垣衣も亦ハ六ど分ち。盤纏を失ぬどうるるべ。是も亦五両を支ちて同じく船頭ハ與へつ。何ぞの雑費ハ充るハ。辞ぞるるべらも。歓喜受て。歎待初ハ弥増つ。垣衣と親切ハ勤て。粥を煮て進めるどゝ。偖而又老僧ハも。五両づ十両を呈して。助命の恩謝を述るハ。那僧些もこれを受ぜ。それハ又益る礼謝物。旅ハ盤纏の影ろうぞまべ。心細きものるを。留めて費ハ充らるよ人を救ハ出家の道ろう。報を受ん與ハ非ぞ。と腹立しげハ窘めて。一切眷顧もせざりしうべ在下又のひるるハ。仰さるるひへども。俺身ハ差當て。做べき忠孝

の勤あり。恁るを奥腹ふ華らるるそ。只一事の儆とする多くば。不忠不孝の奴と
なりて。黄泉ふ怨恨を遺さべきふ。幸やしで聖僧の慈悲ふ。命助られ系らせ
る。恩ハ今這三熊野の奥よりも尚深うるふ。只些少の報も得せぬ。這儘徒し
く別まるべ。怎の日ふ。在下ぐ心の安堵る晌あらん。屈て許容しあへ。と數乞て止ざ
りうるべ。那僧僅ふ云も點頭きさまでふ云る。這船中の衆客ふ向く
劬労せらるるれば。酒ふまれ。飯ふまれ。調じて饗ぜらるるも宜らん。愚僧ハ雲水ふ
伴ひく。且暮の露霜ふ起臥し。難難と積て功徳とする。行脚修行の者なれば。
財あるとハ却ふ。佛意ふ背く處あり。されば決して受ぐこと。といふを在下推回し
て。衆客ふ東西奈らせんとハ豫て心ふ存じ。それ難波ふて留別の時ふ。こそ
系らせる。這ハ犹収ありるべし。と說ども更ふ取敢ぬ。為べきやうなく。仍ふ。
難波へ泊ば衆客ふ東西饗ひく。謝せんと思ひく止ふ。既ふて其翌日の。

亭午少し過る比。船ハ難波ふ泊しべ。乗合の衆客と共ふ。船宿ふ入んと
するふ。那老僧在下を旁ふ招き。俺いこれより船を乗替。土佐國へ下るべ就て
和主を相するふ。忠信ふして節操あり。然ども今まで。親族の與ふ辛労
しく志を得ざ。自今以後ハ好き主を得て。名を挙家ふ起さべ。と
ど。犹いま要時の風雲あらん。且亦火急ふ災厄ありて。終身の哭ぬ。是
前因の縁る所なるべ。甚麽とも為術ぬ。さハあらざる所親の人ふ必一度
遇ことあらん。开後ハ意外ふ心労も少うるべ。侶ひとる女人なりも。和主と道とぬ
宿縁あり。這等の事ハ後ふ必思ひ當る事あるべ。先快迅き所縁の方へ。
其婦人を侶ひて。明日ハ詣て赴くべ。好せよ。と道棄て飄然として港口の方へ去
まくするを在下ハ急忙く推扯め。聖僧の示教謹て承りひ入れ。言葉身上ふ的中し
しべ。向来も必然らん。いと辱くしふつけてハ。只一飯の齋食をぞふ。進らせ。

屈々姑且杖を駐めて尚御教喩を希ふ而已。且い係い何方ふ住職しまふ大徳ふて、法諱い甚麼と稟をやらん願くい示しまへうと。謹で演々まべ。那僧い立駐り否とよ。葷肉を喫まる。俗男俗女ふ交まて。佛餉を受んやういなく。煩累さんか無益ふ。沙門い本来無東西。何處ふ投て屋處するべき。和主ぞ主君と憑むべき人い。舊縁うきはもあらまど。今更出て甚麼ゆうせん。只忠精ぞふ怠惰ぞん。後ふ再遍會ことあらん。と袖を拂うて悠然と眷顧もせぐ去ぐう。

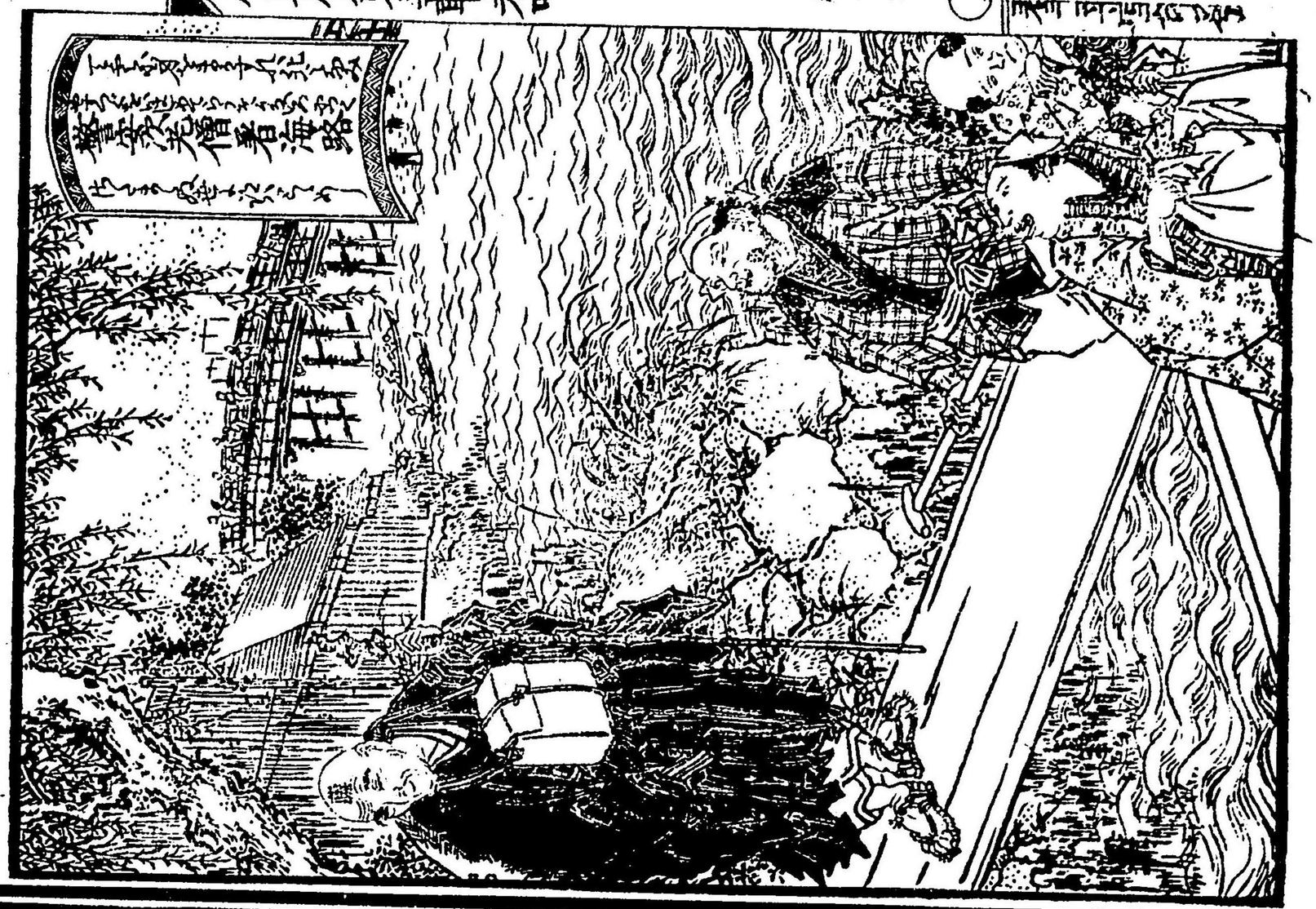
花いまふちうしを出の反かげふなかしどうする人もこそあまと一首の歌を吟じつ。渚の方へ下まを去く。晒々落々さる風骨ふ再び駐んい有繋ふて。小雲時い开方を省送まて。イまこそ。有ぐ。那船宿ふて酒饌を設け。乗相の男女を厚く数待。金百匹充を支與へく。助命の労を謝せ〜ぐ大家大ふ歓喜く舞ま諷ひま。醉を盡〜て。當夜い其處ふ宿まるう。偖而人定まう

と後。在下熟惟ふまう。那旅僧の凡庸ふぬ甚麼する人ふて有ぐる。既住を指とる一言ふ未然もさぞと査せらまね。火急ふ災厄出来まて。終身の哭喪とそれ〜。そも何事ふてあるやらん。所親の人ふ遇んとい〜も。誰ぞ淬ぞう知ぐと〜まべ。明日い詰且這里を出べ〜。但所縁の方へ去けと示さまてるい故里へ回まのるべき欲さうとて帰まを去ぐうとも。那仇ふ〜ぐる親政。目今弟一の權臣ふてその奸黨充滿〜まべ。訴ぐるとも淬成べ〜ぐ。然有とて私ふ撃果さんふも。那ふい所後々まべ。単身ふてい本意を遂ぐ。偖て日數を経ぐる。忽ふ捜索され。狗死するふを至るべ〜。除非それいと厭ひぐ。恩義ある養父蜂六を連累せんい不孝ぐう。左やせん右や做ま〜と想ふふ属て想ひ出る。河内の所生の父母を。訪ふい這首ぐう最邇ぐう。忠義の與ふ思ひ棄て。眷顧もせぬ親ぐうとも。邁べ去ともいえるまじ。先快那里へ訪去て。便宜ふ因て。進退を定めん。伊勢まべ豫て立退て。養父継母の素

意ち如く。二郎を世嗣ぶ立んるの。原是を希ふ所ぐ。さて又國司のおん與ぶも。一臂の功を奏ぶべく。思ひとれども。是も亦。出役の途中〜で。既ぶ命を殞さまで一遍死〜る一般ぶ。後ぶ親政ぶ罪悪を顕露し〜訴へて勸解をらべ。全く不忠とも做べくべ。と念ひ決やうとれば。垣衣を悄々地ぶ招きて。這首ぶ初て瓶中の艱難を訪もし訪ふも〜つ。幼少の時より〜て。迭ぶ認ぬ間るるほど父守延の庭訓正〜く。五柳村ぶ退きても。親く對面する事るるべ。未見の人ぶ會るが如く。互ぶ言寡きのうち。父の横難母の災厄。苦々ぶ尚慰めて。さて在下が胷中を箇様をと詳く話ぶ。かくる情由を有るべ。一且河内へ侶ひて。実の父母ぶ對面し。其うへぶ相摸ぶまれ伊勢ぶまれ送着て。所縁の方へ届くべ〜といふぶ垣衣異議ぶ及ぜば。妾ハ婦女のゆゑべ。いふぶ思ふとも只独。遠ざき逆旅ぶ去べきうらべ。好もうも然るべき様ぶ料理ひるべ。如此るうへ何處の人の手ぶも渡ぶて甚麽ぶらん辛苦き目をも看べきを。亡父の所縁ある。你ぶ俱せられ。流這上ぶも心強〜さるぶても俺母親ハ怎ぶも敬せるひんそまの適来の憂苦を何どさうとて何處を極處と索ぬん俤ぶ〜と知もせば。俺身も共ぶ白浪の底の藻屑と成果て。這悲哀ハんまぶきを現江湖上の憂苦とハ憂苦ハ妾ぶうハ一箇ぶ集寄る心地〜て。命活べくも仕くぞと。又潸然と泣沉〜て在下酷く諫めつ。悔て回らぬ諄言ハ千萬言も要るぶ。自らう念勵〜て身を全〜て父母の讐と報ひんとハ思れども。さうとも志頽折ぶハ縱計怎ぶ強敵ぶうとも。討果さでハ措くべき不小月るれども。在下も大恩稟る師の仇ぶ共俱ぶ幇助とるて必撃せ稟とべ〜といふぶ聊慰さる。面色を看て心を安〜然ども若き男女二箇ぶ共ぶ走らべ。李下の冠。瓜田の靴の誹謗ハ免れで。原来先師の恩義ぶ報ぶ。されぬと て又在下るぶで。誰ぶ伴を俱〜てハ去ん。進退谷る心地ハすれど。那嫂ぶ溺るぶ

手を以ちて引くるのあるべ明日。一日は推ふ處して在下俱して参らばべし。河内へ到らば父母ふ。縁由を悄々ふ告て為術は幾個も有んとりひて當夜り紙戸を阻て那乗相の人結中へ在下は去て寢ようそその詰日那乗人ふ早く別をく一個の老実多。僕を夫ひて。這里へ来る案内者とて。難波を出て参ることて路を垣衣ふ悄々ふいやう。今世を忍ぶ你多ばべ舊名を呼んふ小心多紀ふ似ようを左も右も苟且ふ名を更らまてふいふぞや。とのふふ垣衣領きて妾もここを思ひて什麼とうとも。念慮の隨ふ名着て喚べ。とのそるまふ在下漫ふ考へ。信夫ふ陸奥の郡名ようを思慕とのふふ懸の好まべ詠歌者流の詠べて名高く做ねとぞいふる又那信夫のぢずと詠へ垣衣といふ草の乗を亂して衣ふ摺着うへ母勢物語の一説ふのへうるも聞くまべ。垣衣を开伐訓換て。加支々奴とせば什麼あらんとのべ垣衣會得て。就て信夫を更やて。這首

ふ参ることひ。這ようふ以降の洋ごもい已ふ知せるふぐ如し。思係ふ父母ふ對面へられども。洋翻齟ひて。両親共ふ。不日刃ふ伏ようふ。話旅僧の言ふ錯へひ。終身の哭喪ようまどで又不意実父の遺跡を續て姫ようふ傳き稟せば士父母の遺訓ふ悃ひく。在下ば身は安きふ似ようを。結まべ件の老僧は回もぐも凡夫ようらば。佛菩薩の化現ようとまで思れてひべ又那洋中の海賊と所見とる。高屋敷の壮夫は甚麼ようる者でひひ久。麻吉も又如何ようえいと所まをく覚束ど。俏垣衣はん身遍ふ召仕ようべきちん婀娜ぐふ。不自由の候まべ。幸ふて参らせようふ心限ふく御意ふ悃ひく一日も無ては宜はやうふ。今では做てひへば。垣衣ば心下の憂苦はさらそと查しひごと在下とても無ては得在ば目今の身とようこれば稟出は有繋ふて。一日二日と猶隆ひて。今日まで稟上ざうべ。偖固とは知べ食まてば。姫ようも亡父母も人の女兒と拐して。走まようるるば。



倘や思食まんかと影護く想ひ〻小果しとさる神推量あり。面目もなく絳はこそ。
ひ又稲城大人は説まし、絳も。垣衣い所まし〻う知れども。當下ふすら固辞〻しうる
絳は今更復さんや。此是禀上べきうるゆど。那人の鴻恩は一方ならぬ縁故を顕さ
ん與がりうゑ恁まべやう〻間暇あらば。垣衣女が藤沢へ送り去て。野上氏が遽
與さぶ〻とへ。在下が信義も立難く〻まど。奸党們の間るく時なく。隙を窺ふ目今
い片時もおん側を。立離るべきが非まじバ。垣衣女をも怪そと。禀所せひ〻ふ。去方
定めや躬一箇が姫うへの御慈愛を蒙りて。未甚麼ぞりの神奉公もせひ。今
藤沢へら去ぞとも。假今那里へ到まうとも。猛可が所要の身なるべ。尚何時
まぞも姫うへが奉仕て。大恩の一端をも報いきうんと禀をが心安堵つ。さて過しひひ
ぬと首より尾まで。漏さず脱さず。述べ。姑摩姫倍感歎〻。現様々の人身と。
所が念へば聚散離合。喜怒哀樂の迭代る。江湖上の光景さて不定なるさ

いふ情由とへ知されば。你二人を夫婦ぞと念ひ〻絳へ又ひうるまどさても前
世の宿縁ありと。那老僧の道まて〻めるば。後未必ぞなる所由あるべ〻。如家も
想ふ旨あまど。开へ今議まべき絳へ非ず。原未危殆き船中の賊難を辛うじて
脱まうへ希有なまど。忠魂義胆貞操孝烈兼ね備へ〻。你們なまば。神明佛
陀も見放ちるなど。向来愛〻栄もべし。然まども垣衣へ毎が另まを便るうん。
心中さそと查〻れど是も亦天〻命〻。蓋命運盡ざば再會忘る其期なる
らん。嘆で時の至るを等待然へあまども藤澤へ去べき人を情〻。如家が故が
恥やうへと無情なる絳なれば。復一なるでもなるべき人が。俱〻て送るへ易なまど。今
要時這里が在て時と等なべ悦喜の必あるんと思ふ所由あり。なるば故人が邂逅て。
幇助を得るなる多なるべまを急忙るへ要るきなるべし。就て件の孩僧が甚麼な
る人の果なりうん最々心愛き人なる。歌の意を以て案ずるに南朝が忠志深る人

の容を変ずるかの猜ずるまでも。然とてさぶらう賢き人へ。公家かも武家かも。多くは聞えぶ。公家ゆへ萬里小路中納言藤房卿。武家ゆへ児島備後三郎高徳などぞ。文學和漢の有識と聞こゆ。終に所懐をとげぬ。高徳は武士にて有るまじ。後に出家いまだ迹を断べきぞ。さるべき吉野の先帝と諫難て身退き。藤房卿も有べきぞ。さるべき那卿の出家道世せるまでは建武元年の淳とくに八十年余前の事ぞ。さるべ百歳にも餘るべきぞ。世に在さんは覚束なけれど。道徳兼備まさるべ。長生せらるまじ。それも非ぞ。是も亦後に至りて思識ある有るべ。又高尾舸の壮夫は。東西を掠むる海賊欤。或は英虞将曹の難義を救んと来る人欤。考るべき所由は無きぞ。威風を示して漕寄るは那親政が阿黨と決めて仇讐の人なるべ。那這戦爭ひとるぞ有ん。依て案に廃

士。何ぞ一命を断るまでは至らぬべ。是亦這世に活命て。天縁盡ぬ會期有べ。酷く莫物を想ひと。道が安次垣衣も。倶に然と感歎て。升明断と稱しぬ。長話説は夜も更て。前栽に惜く霜色も。皎と倍て所眷と過しぬ。安次佐と頷と更め。憶俺ぐらム忍慢すうき。這癖者を乳くも向で机密多る話説と犯ぬ。最過失うき。乞や這奴ぐ今宵の顛末。白状せんと庭へ飛下て。梱の索拿詰て。やをぞ盗人ぬ眼前に。一事も漏さぬ稟上べし。偽らぬ今立剋に斬て棄んぞ。奈何ぞや。と烈く詰問ぬるぬり。

第四十八回

義に感じて騙賊昨非を知る
計を授けて勇婦偷児を免る

件の賊は。神草此奇特に感て。被て。手痍の痛苦も忘れ。頭を低て

衆人の忠魂義胆の長話説を首より尾まで熟聴て醉るが像く默々として居
たりしが今宵安次が嘖問を頭を擡げて吐息を衝き連に歎息して道やう此類
少なる你們の艱苦が怯まぬ豪俠義烈揃ひも揃ひ英傑のかん話説を料らずも
を承まして三十八年造り罪辜の天恐きを徐く慮識へば始めて夢の醒る
像く最愧羞く堪難きべ快々首を刎らるべし。さまざまども今宵這里に参り
滓の由を知食どかんかん大事がるるかもあるべ且が可ず身上の懺悔話を首と
て。おん災難の繫るべき仔細を稟て誅せらるまん是併你們の忠孝に撓ぬ御心が感
じて只半晌も善心が立復ずるに報恩るまじべ。滓長くとも听一召せ。抑小的も祖
父の騙局盗賊がもいらべ。陸奥國。信夫郡平田の里が葉四郎とぞ客を莊
客の子が。荷二郎と喚做ず者でひが。父が農業の間隙が牧師をもして暮べ。
悪馬を自在が飼ふを以て。新田少將義隆朝臣陸奥の國司が任ぜらるまして下向

ひし。最初ずるが馬の鑣取が刀出さまして。身近く役めせるひるり。さまべ父葉
四郎が只管主君が役ひ奉ずも。おん跟隨ずとのるるく。
家がをさ。回来給べ。小的が郷里が在て。母親一名が育らまるが。打懲ずるく人も無
まべ成長するが隨ひて。懶惰放埒。母親を説破め。悪き遊技へ一箇として。記憶ずとの
ふもなく。年紀十二三の比よりが。酒をも嗜む。女を挑む。從ひざるが強姦。賭博が
さへ耽ずるべ。悪党が交會ひて。晝とるく夜とるく。家が回らべ。近里比隣の憎
まれ的ず。他人の訴訟止晌がるまべ。母親がこれを苦が病久が小的が十四の春。竟
が黄泉の客と做まべ。當下が小的も有繫が悲しるるべ。形容ずるの礼
を嘗む。五日十日が頭痛ずして。外へも出ず在るども。咽喉過て熟を忘るく譬
喩が漏ず。悪棍駿許が再唆誘され激勵さまして。就て四邊を徘徊。誰が悼者
も無まべ。悪行日々が増長せるべ。村長も持餘。父親を這由報まべ。奉仕の暇

ふ回来て。屡折檻したれども。馬の耳吹く東風と。听流して寄隷なび。葉四郎を為方なく。小的が十五の年ふ。村里の戸籍を削り棄て。永く勘當せらるるに。恁りし後へ回るべき家もあらばいよ〳〵倍。悪事ふ慣ふ身の因果。然有とて膂力ハ人並ふ。些ハ超る所もあるふ。天禀自得の騙君と竊偷。簷を飛び壁を走り。他を瞞き東西を掠奪る。本事ハ往昔の袴垂ふも。さきゝ譲らべくもおぼえたれば。自ら放を不良の賊心。這首ふ初発て。那邊這邊とさく。駈巡るに。ハ他人の東西を竊する時ハ夜叉倡妓ふ交まして戯楽を肆とつ。明を陳ねて飽くまを知ず。倘又賭鉄ふ幸なるに。縮絆一重ふ肌膚を覆ひ。抗を被ると。即ち夜もあるまじ。此ハも怯まぬ贋胆勇。竟ハ故郷を追却せらるるまで。或ハ出羽越後越中。或ハ常陸下野上野。五七箇國ふ横行して。得る騙賊を生活とつ。然るとも悪党の中ふて。小辨口も利て怒る。侠氣も有しが。駿計の奴輩ふ崇られて。さきゝ雌伏もせずゝふ。今より十三年前の春。造化の最多て。イむべき方もなるまじが。竊ふ故郷へ立回り。這首那首ふ躬を潜めて。父親が便を伺ひ。去々秋の秋。義隆貞方。二名の相公と勢力没て。陸奥ふ落さるゝ折。主君ふ従ひ来りて。出て往方も知ずなりしが。九程もなく義隆朝臣ハ。底倉ふて撃るるさふ克も訪ぜてさて止り。恁て夏初より秋末まで。陸奥ふ竊賊まと在しが。首識る者の駿るまじが。倒ふ江湖窄くて。させる手段も出来ぬ。立去んとせし時ふ。関の這方の楫鎖邑の。土産神祭の試樂とて。人賑〳〵く立集ふ。往會せるまじが。何ふもあまと攫ひて。些の路費を得ばやと思ふ。七才許の女児ハ愛々しきが。里盡処ふ立て有しが切て。是を拐して。越後の新浮へ賣做ば。路費ぐらいハ有べと猛可ふ動く欲心て。哄して伯ひ去るうちハ。ふ伯で有つるが。又登豆時ふ小可と。捕んとせられ。伊勢の國司殿人て。稲城殿とて人るゝ。伯ハ开人ふ狼ふて。竟ふハ火危の

基とする叮ど如き難難を受くひとる勅きよ。你の父君館大人へ少将ざるの沖近衆の首長でおいせーぐ小的ど父親葉四郎もん部下小屬らまで平素小泰りくもん恩頼を蒙りねこへ聞知ぢきこる人ざるの竟御とも。知で拐一泰らせこる。遺憾へ今更悔て回らぢ。思をまゆ〳〵斬罪ることを。寃念を晴さるべし。さて小的へ不毛山ぢて。稲城ゆ〳〵捕縛らまん。捕らまんとする折。不慮葛藤小脚を捉まて。千仞の谷へ轉墜ゆ〳〵幸ゆ〳〵て甦ぢこる。其後の事へ怠々。箇様々々ふひきとて。東海道ぢて長総ぢ小夜二郎を。騙屑小繋て。盤費を奪ひ〳〵ぢこと。巴老村の鈍梅勝松門が事。ま〳〵畝川の獄舎を踰て長総を助けこる。そこ〳〵こる這河内へ来ぢて。五十日槌電次ぢ若党小做ぢ〳〵ぢ。那夜綢の混雑小乗じて。楠家の重宝を偷こ〳〵ぢ。隆光を訴へて。却て長総小訴へられ。首を刎らるべ〳〵ぢを。就盛小放免せられて。遊佐の城小在こるまで。一五一十を詳く説て。那長総へ小得ざるを。底倉ぢて撃きりし。

藤白隼人安同が。妻ゆる由とも知ぢて。假ふも妻よ夫ぢと。喚ぢ〳〵。滓の為ぢきよ。ぢ〳〵ぢと。那奴へ既小寝心〳〵。小的を訴へる寃恨ゆる小。豪袁ぢ。老僧小。通じこる情景ゆる。近日小慮知せんと。計ぢこるゆるもゆると。那伏ゆ〳〵ぢ死んりゆへ。有撃小遺恨ゆ〳〵ぢ。開将未凍の諒言ゆる。今へ稟ぢこるその甲斐なし。只等閑小做ぢこる。未知〳〵食ぢ。那泰滝へ仕勢を追ぢ。木造泰勝が滓ゆ。ぢ〳〵。今へ赤阪の館ゆる。持永主小昵近〳〵ぢて。現在那里ゆ〳〵。とゆこる駿く垣衣安次。そこ〳〵亦甚麼ぢと訝り問へば。荷二郎へ泰勝が父親政ゆ俊雅と憑ぢて。密小花洛へ上せ〳〵ぢ。そこ〳〵より満家が料理ぢて。偽使の與小泰勝と乞て。這荘院へ差〳〵ぢ。持永姑摩姫小繋想〳〵ぢて。齊天行者が幻術を頼ぢ。畧奪んと法ぢ〳〵ぢ。山猿の荒出て。その計の徒〳〵ぢ事ども。詳明小悄き告ぢて往る元日小。泰勝遊佐へ使小去て。就盛主小小的を乞ひ携回て持永主小。前科を勸解て

所従に。常に那身に隨へて。仇を防ぐ事を課せ。且長総が虚実を探りて。小的が
欝自をも散さんと。道に依て。小的大に便宜を得て。禀せまゝ〳〵許諾し。
那達の小六ざるハ。父親が主君の令郎に。絶て知れぬ這頭へ来るべ。闇討ゝと
恭勝が。憂を共んと約し。恁る郷に恭勝が。小的を携て回り〳〵路を伊勢
に使役ひ〳〵。草履奴敵介と唤做る的。今ハ不九郎と名を換て。非人と做く
ゝる。撞見し。開夜小的を差て。件の敵介に金を與へ。身を装はせて入稠
せ同〳〵駐めて隷ひ。さて或日恭勝ハ。敵介と小的に酒を吃せて。悄々地に譚ハ
やう。今番館の令郎ハ。箇様〳〵に謀ゝるのひて。姑摩姫を得んとせられし。
又姑摩姫に裏を透して。齟齬ひるのゝ。正直の女占子を以て。換玉に
為ゝ〳〵。郎君大に憤らゝを。遊佐主様に是を勸解て。再謀らゝ旨を
る依。件の事の差錯ハ。秘て人に漏ゝなど。和郎ハ悄々に聴ゝ。必ず他に

漏し。俺も昔膳正直の。庭の山ゝ千里鏡にて。八九の荘院を覗看し時。另に一箇の美
人を看ゝる。伊勢に要奪せる。稲城の信夫は最能肖る。故に郎君の卿
婚礼整ひゝ〳〵に禀請んと約し。措し。遺憾しを聴て。敵介の不九郎ハ
駭きて。原来信夫を看のひゝる。小可も嚮日に。如意宝珠院の門外にて。信夫が
上墳の代に去るを。慥に看ゝる。什麼ゝ〳〵。升信夫
ぶ。正可に那處に在んとハ思も繋ぬ。ぞと。他ハ俺を父の仇と。狙撃んと
ふ由なれば。前番父は告て。他が東に去んとする。船中に人を伏て。蒙汗薬を
呑せる。結果のゝとのひし。父親ハ許諾し。開後俺ハ花落を出て。這
處へ下りてあるゝに。父親とハ表向絶交なれば。便りゝてゝ回答ハ未慥に
聴ぬ。那謀行なれば。這世に信夫が在んやうに。見錯へるゝ非ず。
とのゝに不九郎頭を掉て。伊勢に他を奪ひ。折も。三十日の別荘に在し

頃も面を包まて看せざりしかば。他人小可と知れども。小可は他を看錯へべくも也。那上墳の回路ふ。小可鈔を乞しかば。伴當の男ゞ拿出て。所来んとしかるふ。財布の紐の。腋刀孔柄ふ纏まれるを。解とて躊躇する間ふ。他人開頭ふ行こうとしかば。左の耳ゟ黒子まで。脱おるゝ認得てひゝと道ゞ峯勝大ふ駭き。然やとして又這國へ。怎ふして来さん。最精きゆゑまべ。尚克真偽を看決て。とそその日は他譚ふ移やるゝ。昨日峯勝着急しゝ小的を映て悄語やう。明後日は郎君河備の館へ。誓入ゆとて出立のふ。其後乗のおん伴當へ。豫て俺們ふ分付られう。怎まゞも那信夫ゞ。這頭ふ居べ由断はあらぞ。依て屢推辞しゝども。郎君一切允まぞ。當惑這首ふ逼やこう。就ては和郎ふ憑むるあり。汗は另の辞ふもあらぞ。和郎は蒼を飛壁を走る。竊偷の術は得ずとしかるは脅ら力も人ふ起らまべ。しかふゝて八九の莊院ふ竊び入て。那信夫とおゞゝき女を

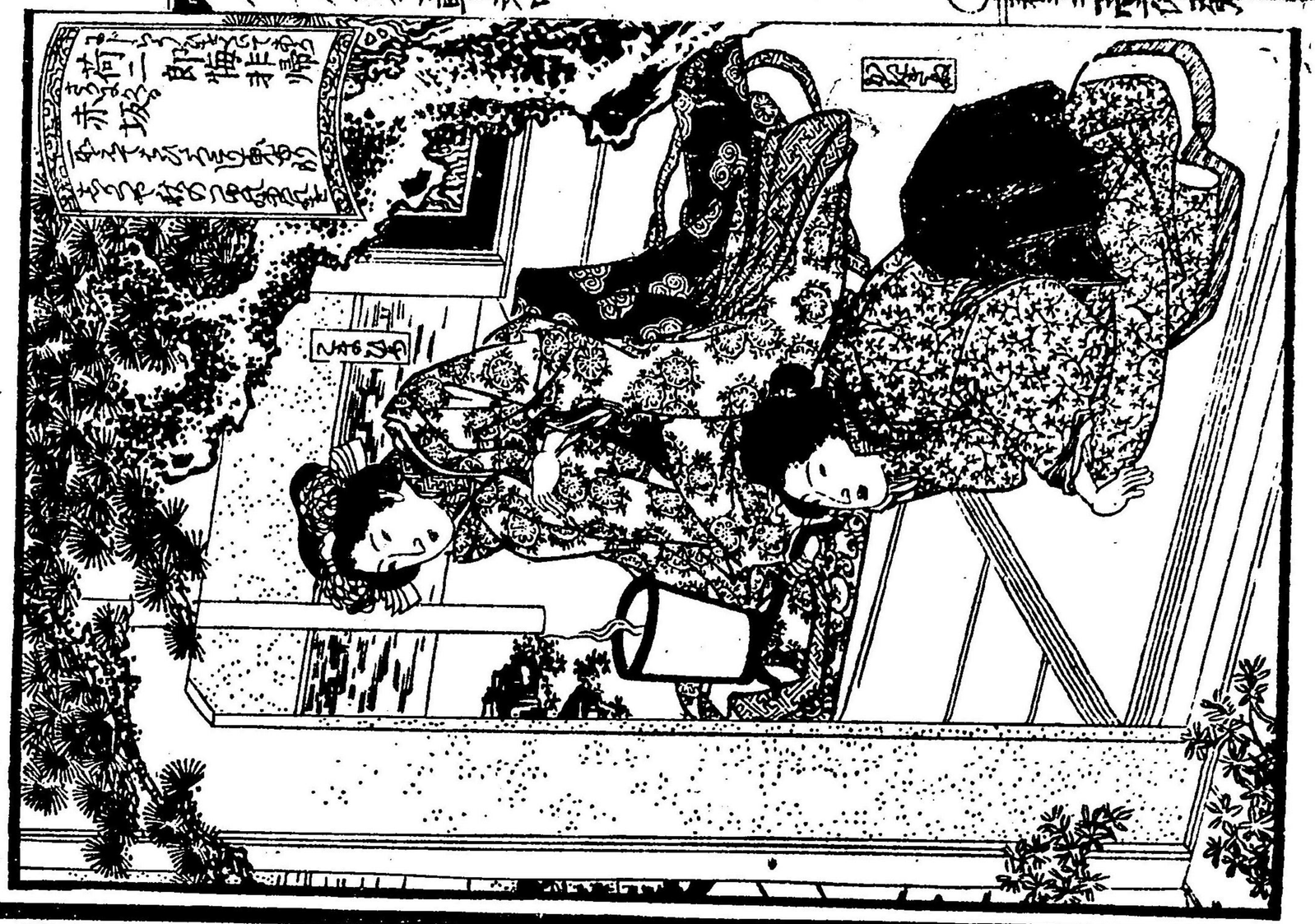
搔攫ひて得させよう。さらば俺その面を看て寔ふ信夫ふ非やせべ口説落して妾まべく。倘又信夫ふ決らば。殺して患の根を断べし。萬ゝ一箇も愜ひ難べ。那文の出所来歴具ふ听知て回らべし。那姑摩姫は武勇剽姚。丈夫は捷やう。その上ふ隅屋某甲と喚做しる。若党あるて是亦。萬夫不當の本事あり。と听ては虚を馬ふ乗て。明後日の件當ゆふ立ぐさう。和郎も其頭ふ小心して只顧這義を憑むべ。というふ的推辞難て。成る否ら知ぐども。然迄ふのくまくふゆまらべ一掉して験むべ。任他那姑摩姫へ。神ふ通ぜ術あまべ愁ふ竊入て。首を失こうゆもやらん。況や東西を奪ふも非ぞ。活る人を畧するは甚難き業まべ褒美は奈何と期を推て峯勝ふ會得せ。就て昨夜も這処ふ泰やと。那這と覘ひまどども。内外の小心御堅固やまべ。隙と得ずして徒く回り。尚又今宵も之間を。幸やして紛ま入。宵ゟ躲まて窺ひふ。垣衣どの厠ふ去とて。独外面へ出ふを

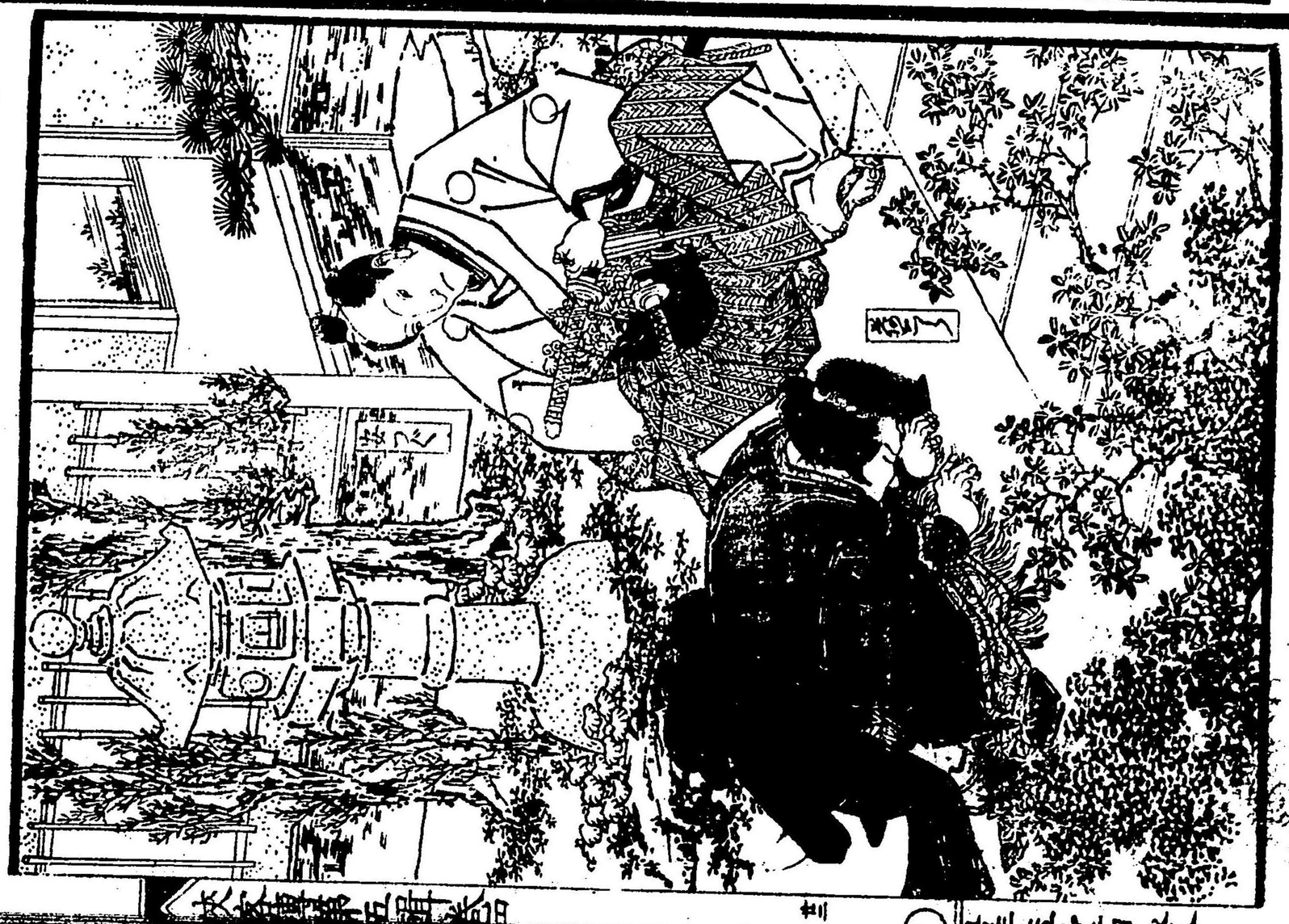
看て。天の賊と走蒐も。矢庭に拿へて走んと。案外の剽姚に立地眼を傷られて。
偖阿面々々と捕まきれ。這他に亦とべきなりとこれひ。快々首を刎られて。
那奉勝們が謀畧に乗ぬ御小心ひべと道に大家所竟て。意外の念慮を做
さる中に。垣衣に愁然る面を拾て歎息し。姑摩姫の前に額突て。那木子奉
勝に女が親父を害し。雙敵でりへが。軟弱き婦女の身なれども。いで一太刀寃ん
と。豫とよう思ひたれど。在家を知ねば默上て。遁るもあるや赤阪に在と呼てい
打も措まじ。然まどもさる權威ある。宅内に包護まて居んに。斬く擊るべきもあ
らねど。幸にして這賊人が妾を拿へて奉勝に贈んとて捕へらまし。今善心に復て。
自ら稟まに偽るべ。姑且這奴を免せるへ。妾は他に拿へらまし去て奉勝に詐り
寄。寃と復し仇ちまし。假令仇を擊ずとも。生て再遍回らんへと覚束
なくこそ。海より深く山より高き御慈恩を被ぬる身の。せめてもあん後に立

もせで。這侭に別まきらんに。最も可畏き業に仕まど。誠に餘義る死淫るれば。
願くは目今より。おん暇を賜るべきやいらんと。日屬は萬箇条順にて。風に
靡る青柳のいとも沉静き小女子が。父親の寃家は今眼前に在と听てい
怎ぞに。憤怒に堪ず。魂魄を絶て擊んと。言累ひ。羞らく色に赤心所着て。
有繋に服屋の宰臣。なりる。館大六英直が。女児と所知て健氣し。姑摩姫
は那這と。看て听て感歎して。通微妙き仵の孝義に前把る家に生まん
者は。婦人なりとて死を怕まんや。誰も怎して有べきまで。さいあるべきに擊難き。寃
家を急に擊んとして。仇の刺客を案内に立。淫遂ぎるを知つも。開身を贅
に龍の住む淵に入まくする志の孝烈はさるべきに。謀畧の短きに仇こう心を
静め時を等て。尋常に勝負を決し。當下擊とも擊るとも。只運命に任とべ
し。只今淫を急可して。竊に仇を擊とるとも。却て好人の手に死ば世に孤孝

と知る人もあらく。狗死せし示類せん欲とうとても忠孝い名聞ふするゆふいわるゆふど。武士い家名を惜まと。祖先の恥を顕さぬぶ。惣未皇朝の風俗ゆまべ。死をのく忙ぐい要るゆふ。這誼い奴家ふ任せて措ひ遐うぶぞと本意を達する。壽策い九個も有ん。登時い復一も。恩義の與ふ助太刀して。那這共ふ両全の美名と天下ふ揚とべ。遊莫眼前の。仇敵ふ威勢ゆまべとて。看つ遁して月日を過さい。俺身を摘て胸中の憂苦さとと査ることど。奴家も曩ふ仙媛の遺教ふ背きまりて。単身ふて義持を撃まくしてる錯誤う。淮盈夫婦を徒ふ。刀ふ伏しやる折い。千悔開首ふ及びぐう。殆脾を噬ろきとべ前車の覆ひ。縱い遐くも有ぬ物と。你も後車の誡と。雲時忍びてゆうぞや。と説喻とまて垣衣へ。始て夢の醒ちぶ像く。數回額突つ。諾神そしき姫うへ。ゆん明ふ蠢愚ぶる。妾ぶ耳ふも最克入て。御教誨の旨一々ふ。肝ふ。銘じてさひうふ。仰ふ従ひ時を

等て。尋常ふ名告係け。勝負と天ふ任せ付うん。寃家の在所を所うる伏ふ。不覚ふ遁と佐りしへ。甚ぶき誤りひと言稟しつ歓喜べ。姑摩ふへうち頷き。荷二郎ふ眷顧て荷二郎とやらん慥ふ所け。和郎ぶ做ろる年末の。悪事の。次第い神明佛陀も。免しゆうい所ゆまべ。只今首を刎べきされども。幸ふして垣衣と傷ど。又衆快の信義と所て。心と更めうとゆまべ。今夜うハ一個の善人とこと云べきうまと。然まべ今番の科と免して。命を助け差とべし。目人う言ー一念と。翻とべて後々い人と幇助て功と樹。今まで作ー悪行と。補ぶのゆうとど。天地の神明和郎ぶ身と必罰ゆうべ。意得うう。と告知せて。復一开奴ぶ索と解て。快後門より逐出れ。といふ安次眉と顰め。仰ふていひく。ども。這奴い九遁う人と騙て。或い殺ゆどして。大畧机変ふ長うまべ。今一命と助らんとて。前非と悔う面色ハすまど。放べ復や悪念と。蜚起とべきも料ひぐと。





且は衆人の机密をも聞識て、持永恭勝們と商議して、甚麼様の災を。
慮出さんも知べからざる只快他が望に任せて。誅戮ひはべるや。といへば姑摩姫微笑
て。你の遠慮はさるゆゑ。他衆人の忠孝に感て自ら開非を知て。今宵
よりして善心に立回りなんとすれば。除非開言詐偽なりとも。これを殺さ
は善人を傷ふに。又人を殺さ者は必殺して免さるべ。古今変らぬ法曹なれと。
猶ほ他に殺さるとなん。慳貪不貞開身を逼て。天誅殆及ぶべき者共なれば。
訴へずして殺しなるも。姑く免さるべ。人の偖亦衆人の行状を白地に聞知
なん。牌の不便に似たれども。約莫英雄豪傑は。隠さるを行さば其事月史
に載らるて。千載の下に傳ふとも。美譚と做すべき節操を立ば天地に糸して
羞ることなれば即今聞こし。野上著演達助則英直夫妻維盈夫婦は
二名いまも更に。守延の忠。目四郎が侠。楫取庭吉に至るまで。忠臣の志士の所

為あらざるべからず。されば開祥室町家へ聞えんとも異うあらば抑民の父母として
は善を揚。悪を懲し。縱計然敵ろうとも。開忠信を賞してこそ。國家を治
め果べきを。義持心窄くして。南朝旧臣の裔とは。根を絶葉をも枯さんとする
は。是に薄情きわまりなし。されば新田楠木の餘流と知べ。害心あるともいへ難
けれど。是亦天命なり。時運なり。君御聖運幸なれば開方ざるの人その性命も全
るべし。倘又御聖運傾べ。誰と倡ふる活命て。仇讐と共に白日を見んこそ助
則も同志なるべ。又持永恭勝們は。斗屑の小人なるべ。怎様に謀ることも。丈
尺の知なる牌どもなれ。機に臨て寝に應じて。這首にも小心をなすべし。但堀衣
は荷二郎に。旧怨もあるなれば殺まくも思ふべけれど。今又究家の在所を報ふ。
寸功をしともいへべ。放ち遣んは甚麼ぞと。呼て堀衣怎ぞ指ん。
宜しく荷二郎は妾を拐ふる者なれば。こそこと殺ふるに非ず。今の

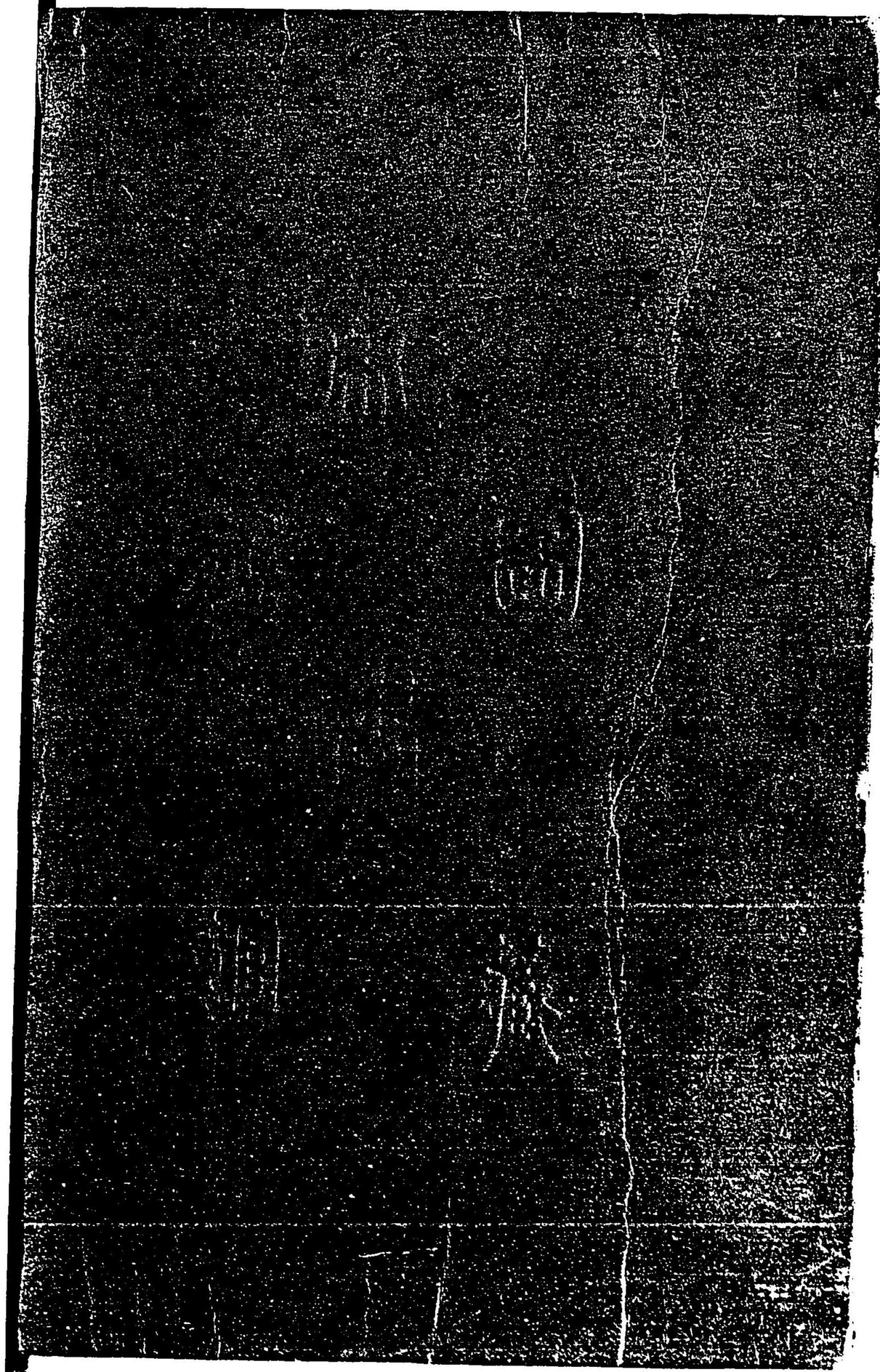
忠告ふ想接て。然と遺すべくも侍らぬぞ。といふよ姑摩姫頷きて。さらば復一快回らで。天明ふ程もあらぬふ。奴隷共よ知まてへ又妙なる処もあり。快させよと着急すまべ。安次郎感心し。現姫うの御明論。今ふ始め事ぞう寛仁大度のふ料理へ感伏の外ひなし。もへ助るぞ荷二郎とそ。索を纜きて。俺腰ふ差こう他ぐ腋刀をぞとそ遮字せべ。荷二郎へ只平伏て頭を地ふ着。四十年来一滴の泣水を知ね暴夫。絆の始末ふ感激して。聲を放ちて哭居こそうぐ。念ひ難てや腋刺の刀をすうと引抜て。自ら吮を刺んとするを。安次郎遽さべ踢落して。狼嘯こるう荷二郎よ。徒辱き姫うへの。理義と諭して許すこるふ。今東自害せんとするへ。未悟らぬぞや。醒めやと。罵り懲せべ。荷二郎へ。徐ふ泣水と拂ひ。愚鈍の耳ふも理逼こる。御教訓の趣へ。とさく辨ひへ。狼唄てうるへあうれども。熟思うとも着のへう。比年日屬几番う。他の難義と着も願らで。財と奪ひ人と售て。父母妻子ふ歎悲と係こる。哀と這首ふ慮知と。悟りて見まべ是ぞふも。活永經て在まんや。こうを況や。俺父親の恩と稟こる館大人の令愛と拐して。盡ぬ枉難と繋系うせ。知ねるやこへいひ。主君少將ざるの公子こうる小六殿と仇うて。狙撃んとしうあどへ。死とても罪と贖ひぐあり。恁うを今宵這御館へ竊入つ垣衣どのを捉へんとせ。罪とも問まぜ。首と接まてれぞそ。逝まて赤坂へ回らうべきう。あん身の猜ひるふ處悉く開理ると。尚姫うへ御心長く。机密を听こうる小的ぞる。旅ちて願こるへ。御心廣きあん料理へ。大丈夫ぐふ做得難き。御胆畧と想ふふ着ても。只差愧べきへ俺身のこ。且就盛茶勝們ふ譚相まてへ過差うるまど。就盛茶勝も亦小的と。知こる好意ると。ふあうれと。這儘ふて北も走らぐ。亦是人といふべうべ。怎まふてても今宵ふ限り。小的ぐ運命ちれば。只快死して死めへ。やよ喃々とうち勸解て。喞言ぐはしく搔口說く。聲も曇こて小亂こる。泣水の雨ふ悪念と。洗ひ流ぐ色所見て。

誠實ハ自然と現ぜてこそ。姑摩姫所で感嘆し。適微妙き和主ぐ覚悟。今宵よくくて善心ふ立も回ぐ。差悪の端感ぜるふ餘あり。現悪ふ強き者ハ善あも亦強くと云。俗の諺も和郎ぐ身ふ。今宵首めて着るつゆを得こう。然らば和郎ふ託ぜべき。一件の机密あり。這方へ倚れと。喚途着て。目今死る命を存在へ罪を贖ふるあるを。克為べきこと。と問撃ぜべ。荷二郎思ひ〳〵こう咲て。死をの急ぐあへひちるど。唯道理の差急俄て。自殺せんとしひと。倘存命てあん與ふ做る辭あるべ頭を砕ぐ。骨を刻まるひとも。辞ぜべくいひ〳〵と不覚ふ勇む聲高ぐふ意氣憤然こうてるを。姑摩姫ハ噫莫喧と推禁めて聲を悄め。和郎ぐ心底さぐ有らん。那歇店の目四郎ぐ野上史の高義ふ感じ。害心を更めて。藤白隼人と撃るふ擬ふとこそ非ぬども。那桑勝ハ持永ぐ庇陰ふ倚る大敵あるべ。垣衣一個ぐ力ふ。即今撃るべくもあるぬを。和郎幸ふ立回ぐこそ。幇助て仇を撃しあるべ。主君ふも亦官長ふも。

恩を報ぜる一端ぐべ。開計策ハ徒々〳〵箇様々々と事詳悉ふ。聞き示せば荷二郎ハ耳を傾け感心して。仰承りひぬ。現も美じきあん料理。そうべ暇を賜りて。赤阪の宿所へ回るべ。但這侭回ぐこそハ。他ふ怪と猜ん狡希くハ怎東西ふ。竊入る証と做るべき。東西一箇借るべ。といふふ姑摩姫領きて。開頭の用意決めて住しと垣衣を顧て。你の衣服を一個出しぬ。と分付て荷二郎ふ遞与ぜ。這ふ袖を以て怎々道ぐ。兼勝必精ぐ。又豪袁ふ悪僧ハ聊の幻術ありて。甚麼とも前知まる由あれば。開奴ふ知ぬ様ふそ。郷ふ垣衣ぐ水ふ浸ぬ。神草を乾ぜて。机上ふ措るを拿て。こハ神仙の賜ひる。人間ふ珍き霊草あれど。姑且和郎ふ貸措べ。這草を身ふ属るふ。豪表怎ある術あるとも。和郎ぐ意衷を知るるを能ぐ。目今痛痍の頓ふ痊しも。全這草の功験あるべ。努々麁鹵ふ思ふべからぬと。説喻して與ふれば。荷二郎ハ雀躍して酷く歓喜び護符

嚢を解開きて件の神草を受収めさらんとだらう身を起し。三拜して那小袖と。閔やと肩ふ打懸て。後門の方へ出去べいよ〳〵頻る雞の聲ふ紫〳〵たる横雲の色も東の空ふ所着て。奴隷が咳〳〵庖湯の後を。那誰時の薄闇き。霧ふ紛れて回りたるう。

作者云。此回の次ふ北畠俊雅河内へ来りて再遍姑摩姫の婚姻を促せ事。又た二郎が赤阪へ回りての所為。垣衣が復讐の事。豪衣長總們が顛末と。著はべく思ひしうども。然而ハ小六が出現を詰するふ聊如ある所はあるとべ。赤阪の一條ハ姑且後集へ讓りて。次回ハ専小六が事ふ及ぐう。清官請爭の治定せぬと忍びて。後集の發ハ凡を等べし。

開卷驚奇俠客傳第五集卷之四終

122
25
15